細胞診専門医・指導医
駆け出しの頃―青春を語る

振り返れば，そこに青春

和泉市立総合医療センター病理診断科 特別顧問，甲状腺疾患センター長
岡本甲状腺クリニック 学術顧問
和歌山県立医科大学 名誉教授
近畿大学客員教授，中国山東大学，山東第一医科大学 客座教授
覚道　健一

細胞診専門医会会報編集委員会委員長　森谷卓也先生より，「細胞診専門医・指導医駆け出しの頃―青春を語る」の原稿依頼を2024年8月に受けました．現在の職（和泉市立総合医療センター　特別顧問）についても，病院から「肩たたき」を受け，2024年12月末に，常勤職を退職し，非常勤職に移行することを決めた後でしたので，この原稿依頼は，とどめを刺されたような気持ちになりました．思い直して，細胞診専門医，病理専門医として歩んだ52年間に，お世話になりました日本臨床細胞学会，日本病理学会の皆様に御礼を申し上げる機会をいただいたと解釈し，この原稿をお引き受けさせていただくことといたしました．

1973年に25歳で和歌山県立医科大学を卒業し，大阪大学医学部第1病理学教室で，病理医としての歩みを始めました．取り組んだ研究テーマは，1）甲状腺髄様癌，2）副甲状腺病変，3）甲状腺腫瘍診断における病理医の診断の揺れ，4）甲状腺境界腫瘍，5）IgG4甲状腺炎，6）甲状腺細胞診，7）甲状腺診療における欧米とアジアの差異，8）乳癌の研究，9）肝炎の研究などです．私が最初に細胞診に触れたのは，病理学教室大学院生（1973～1977年）のころ，大阪大学付属病院で，甲状腺橋本病の術中迅速組織診断を担当した時です．私が慢性炎症（非腫瘍）と返事しようとしているときに，細胞検査士草分けの病理主任技師が，気を利かせて，組織のタッチ細胞診をして，「甲状腺癌（リンパ節転移）」と診断しました．リンパ球を背景に濾胞上皮細胞があり，核異形もあることから，リンパ節からのタッチ標本と勘違いしての誤診でした．「病理医駆け出し」の私は，「他人を疑う」ことを知らず，「細胞検査士が癌と診断したので，術者の肉眼診断を優先して判断してほしい．」と，いわゆる「診断保留」の返答をしたことを鮮明に覚えています．当時細胞診は全く経験がなく，どのような長所と短所を持つ検査であるか分かっておらず，「細胞診を学ぶきっかけ」になったエピソードです．術者は，高井新一郎先生（平成27年逝去）で，この診断報告で，私の名前を覚えていただき，大阪大学第2外科の甲状腺グループから，目をかけていただきました．神前五郎教授が大阪で第9回甲状腺外科検討会を主催された時に，甲状腺髄様癌の全国集計に参画させていただき，私が甲状腺病理を専門とするきっかけを作っていただいたと感謝しています．この原稿を書いている2024年8月23日のPubMed文献検索で，Keyword（Kakudo K AND Thyroid）で，201文献がヒットすることを誇りとしています．残念ながら，高井先生，神前先生の写真は手元に見当たりませんでしたが，写真1は，左から，甲状腺専門病院，隈病院の2代目院長隈寛二先生（平成20年逝去），3代目院長宮内昭先生（当時大阪大学第2外科），大阪大学第1病理学教授宮地徹先生（平成20年逝去），著者，多方面からご指導いただいた片山正一先生（平成28年逝去），甲状腺病理を始めるきっかけを作っていただいた諸先輩が写っています（写真1）．大阪大学在籍中に出版した髄様癌組織亜型（乳頭型PMID：463561，巨細胞型PMID：210736）の論文は，80回以上引用され，WHO分類にも引用されています．当時は論文別冊を著者に請求し，著

写真1　甲状腺髄様癌の研究（PMID：609355）で学位をいただきました．症例提供でお世話になりました隈寛治先生（左），宮内昭先生（左から二人目，当時大阪大学第2外科）への御礼のため，第1病理学教室主任教授宮地先生（中央）と，第1病理学片山正一先生（右）が，御礼の会を主催いただきました．

写真２　メーヨ医科大学病理学教授カーネー教授ご夫妻と，ご自宅に招かれて，米国の病理学教授の生活ぶりを垣間見ました．

写真３　初期のころのサイロイドクラブメンバーと症例検討会．

写真４　2005 年 和歌山市で第 52 回日本病理学会秋期特別総会を開催しました．特別講演に，隈病院宮内院長（左から二人目），ポルトガルのシモエス教授（中央），米国のカーネー教授（右から二人目）を招待しました．

者から別冊を依頼者に郵送する習慣があったのですが，巨細胞型髄様癌の論文では 1000 部以上の別冊請求があり，大変驚きました．この論文のおかげで，米国留学時に Mayo クリニックに受け入れていただき，J Aidan Carney 教授（写真 2，令和 6 年逝去）の指導のもとに Mayo クリニックの髄様癌症例を検討させていただきました．この論文では髄様癌の発症年齢，予後に病型による違いがあること（MEN2B 患者の髄様癌は，若年発症で生命予後不良）を初めて示しました．遺伝性腫瘍の genotype-phenotype correlation の概念（後に高悪性度 *RETp.M918T* が MEN2B 症候群を形成する原因遺伝子変異部位であると、別の研究者により同定されました）発見の端緒となった論文と誇りとしています。この論文（PMID：2859923）も 100 回以上引用されています．

帰国後，1980 年兵庫医科大学病院病理部（植松邦夫教授，平成 23 年逝去）の講師に採用いただき，診断病理学の経験を積むことができました．病理専門医（第 526 号）を申請（第 4 回認定）し，日本臨床細胞学会細胞診専門医（指導医）試験に合格しました（第 495 号）．このころの思い出は，若手甲状腺病理医たちと Thyroid Club を結成し，出身大学を乗り越えた学術活動をしたことです．「50 歳停年」，「教授に昇格したら除名」という面白い規約で運用されましたが，多くのメンバーがその後教授に昇任し，規約を変更せざるを得ませんでした．Thyroid Club は現在日本甲状腺病理学会として活動を継続しています．甲状腺癌取り扱い規約の病理委員として，その編集に多くの会員が協力しています．30 歳代から現在まで 40 年間の交流と，会員の皆様の友情に心から感謝しています（写真 3）．

1985 年東海大学医学部第 2 病理学（渡辺慶一教授，平成 20 年逝去）に異動し，副部長として付属病院病理診断科（長村義之教授）で診断病理学を経験しました．東海大学では，大講座病理学教室の運営を経験し，構成員のほとんどが教授に昇格するレベルの高い仲間との接点は大きな刺激となりました．私の病理学，病理医キャリアの中で，東海大学での 5 年間は，研究活動，学会活動の中心部分を形成することができたと，東海大学病理同門会の皆様に感謝しています．

1990 年母校である和歌山県立医科大学第 2 病理学教室教授に採用いただき，20 年間在籍し，24 名に医学博士，3 名に医学修士の学位を授与することができました．また第 2 病理に在籍した教室員の中から，2024 年 8 月までに医学部教授 8 名（若狭，森，森川，劉，韓，楊，横井，松浦），4 年制大学教授 6 名（宇都宮，布引，奥野，中村，東家，栗林）が生まれたことを誇りとしています．多数の優れた教室員に恵まれたこと，教室員のたゆみない努力と，その向上心に感謝しています．この間に，日本病理学会秋期大会を和歌山市

で開催し，米国カーネー教授，ポルトガルのシモエス教授，隈病院宮内昭院長を特別講演に招請しました（写真 4）．日本臨床細胞学会関連では，近畿連合会会長を務め，日本臨床細胞学会理事，専門医会長，第 49 回秋期大会（写真 5）などを担当し，学会賞を受賞しました．

2012 年，和歌山県立医科大学を定年退官後は，神戸常盤大学医療検査学科に 3 年間在籍しました．細胞検査士養成コースを担当し，細胞検査士の養成に貢献できたと自負しています．その後，やました甲状腺病院，近畿大学奈良病院，岡本甲状腺クリニック，和泉市立総合医療センター病理診断科などで，非常勤病理医，常勤病理医として診断を担当しました．その間甲状腺疾患の病理学的解析 / 研究，甲状腺細胞診断だけでなく，病理学会，内分泌病理学会，がんセンターのコンサルテーション委員として，甲状腺疾患のコンサル

写真 5　2010 年 11 月 第 49 回日本臨床細胞学会秋期大会を神戸市で開催しました．和歌山県立医科大学在任 20 年の最終年度でもあり，この写真のメンバーが，最終年度を支えていただいたことに感謝しています．

写真 6　24 名の病理医を含む，患者代表，分子遺伝学研究者，内分泌内科医，甲状腺外科医たちと，NIFTP 国際ワーキンググループを結成し，NIFTP は癌ではない境界腫瘍であると結論しました．引用回数 1500 回以上の論文の共著者となりました．

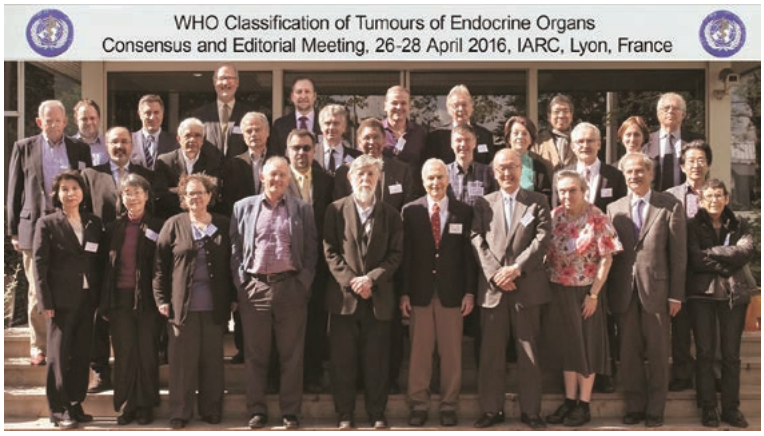

写真 7　第 4 版 WHO 分類（内分泌臓器腫瘍）の編集委員会の記念写真です．写真 6 に写っている病理医の内，9 名が含まれています．写真 6 の，NIFTP 国際ワーキンググループは，WHO 分類第 4 版の準備委員会だったのです．

写真８　横浜で，2016 年開催された国際細胞学会で，スライドセミナー４を担当しました．左から中国の朱先生，劉先生，米国大堀先生，著者，米国マイケル先生，米国ジン先生．

写真９　横浜で，2016 年開催された国際細胞学会で，甲状腺ベセスダのシンポジウム３件に参加し，欧米の多数の細胞病理医たちとの知己を得た．

写真 10　2017年アジアオセアニア甲状腺学会で，Asia Thyroid Working Groupを発足しました．2017－2022年の初代会長として，会員のグループ活動を多数主催しました．その結果から 100 篇以上の共同研究論文を生み出しました．また写真にあるように６回のコンパニオンミーティングを主催し，多くのメンバーとともに Thyroid FNA Cytology を出版しました．

テーションを担当いたしました．

国際的な病理研究活動では，境界腫瘍 NIFTP の提唱に参加し，引用回数 1500 回以上の NIFTP 提唱論文（PMID：27078145）の共著者となりました（写真 6）．この結果から第４版，第５版 WHO 分類の編集に，著者として参加しました（写真 7）．細胞診断学分野では，2016 年横浜で開催された第 16 回国際細胞学会で，複数のプログラムに参加し，多くの海外の友人を得ました（写真 8，9）．この交流から甲状腺ベセスダ診断様式第２版，第３版の著者，WHO 細胞診シリーズ，頭頸部腫瘍の編集者となりました．

2017 年，多くのアジアの病理医，細胞病理医の賛同を得て，Asia Thyroid Working Group を結成し，2017 ～ 2022 年の初代会長に就任しました（PMID：37981725）．このアジアの病理医を中心とする活動で，「甲状腺診療における欧米とアジアの差異」に注目した出版を続けています（PMID：12409728，PMID：33224851，PMID：35159081，PMID：37278105，PMID：38874075）．国際的に無視されることも多い，アジアの診療の特色とその利点に焦点を当てることが

写真 11　2017 年中国山東省政府より覚道に，和歌山県立医科大学と山東医科大学の友好交流への貢献に対し，斎魯友誼賞が授与されました．同時期に元の留学生李先生（山東省立病院病理科）が，内分泌学会のシンポジウムに採用され来日されたため，あわせてお祝いの会 同門会を開催いたしました．

写真 12　2017 年 5 月大阪で開催された第 58 回総会春期に，中国人留学生劉先生（上海交通大学第 6 医院主任教授）が来日し，歓迎会を同門会主催でいたしました．

写真 13　2024 年 6 月大阪で開催された第 65 回総会春期時に，細胞診に関与している同門会のメンバーが，覚道の喜寿を祝い集まっていただきました．

できたと自負しています．これは第 2 代会長，台湾病理学会前会長，頼先生に引き継がれ，活動を続けています．多数のグループ活動から 100 篇以上の共同研究論文を発表できたことも誇りとしています．協調的なアジアの病理医たちの温かい協力に感謝しています（写真 10）．このメンバーを中心として，2024 年 Springer 社より，第 3 版 Thyroid FNA Cytology, Differential Diagnoses and Pitfalls（https://link.springer.com/book/10.1007/978-981-99-6782-7）を出版しました．ユニークな細胞診教科書ですので，どこかでぜひ手に取って見ていただければと思います．さらに現在 WHO 分類が細胞診シリーズ第 1 版，頭頸部腫瘍の編集に参加しています．この細胞診専門医会会報が出版された後になると思われますが，WHO 分類頭頸部腫瘍の細胞診シリーズの出版に期待いただきたいと思っています．

最後に第 2 病理同門会のメンバーの最近の写真 3 枚（写真 11 ～ 13）を提示させていただきます．同門会の皆様には，それぞれに多くの苦労はあったと思いますが，この写真に写る皆様の笑顔から，私が担当した第 2 病理の 20 年間が，記憶の中では，「楽しい思い出と，笑顔のある職場に昇華している」ことがお分かりいただけるのではないかと自負しています．末筆ではありますが，教室員の皆様方からいただきましたご援助とご協力に感謝し，同門会の皆様の益々のご健勝を祈念いたします．